



## 年間第 25 主日 (マルコ 9:30-37)

途中で何を議論していたのか振り返る

年間第 25 主日 B 年、イエスは弟子たちに問いかけます。「途中で何を議論していたのか」(9・33) この言葉を手掛かりに今週の糧を得たいと思います。またこのミサは敬老者のためのミサです。わたしたちの先輩にミサを通して感謝を表しましょう。

16 日(水)にお招きいただいた福見の園敬老会で、思いがけない人が舞台上で歌を歌っていました。わたしの洗礼の抱き親である鯛ノ浦のおじさんです。もうおじいさんですが、わたしが学生のころから鯛ノ浦教会信徒会長としてずっと教会を支えているのを見て来ました。

当時喜蔵おじさんは営林署に勤めていましたが、わたしが司祭に叙階された直後、木の切り出し作業中事故に遭い、後遺症を負ってしまいました。つい最近福見の園でデイサービスを利用していることを知りました。病人に聖体を授けるチャペルで喜蔵おじさんを見たとき、びっくりしたと同時にもうこんなお年寄りになったのかと思ったものです。

身体の不自由にもめげず、懸命に生きている姿に心打たれました。そのおじさんが、聖体を授けて福見のチャペルから帰る間際、「中田神父さま、もう銀祝ですか？」とわたしに声をかけてくれたのです。自分の身の上話ではなく、わたしへの気遣いをしてくれたのです。

「今 23 年目だからなあ。喜蔵おじさんもう少し元気でいてね。」あとになって「少し配慮が足りなかったなあ」と思いました。どれだけお世話になったか分からない恩人なのに、感謝の言葉一つすら言えなかった。「あと 2 年たっしやで暮らせよ。」まるで社交辞令のような言葉。相手に対して失礼ではなかったか。そう思ったのです。

わたしが司祭になるまで、おじさんは自分の両親と変わらないくらい面倒を見てくれました。いよいよ司祭になるときも、だれよりもお祝いを包んでくれました。そして待ちに待った司祭の姿をその目で確かめたと思ったら、その後は身体不自由という十字架です。

ふつうでしたら、どれだけ神さまを恨むことでしょう。わたしが司祭になるときまで、洗礼の抱き親としてずっと目をかけてくれたように、その後の 23 年間も、何かと世話を焼いてあげたはずです。思うことを一つも果たせないまま、今日まで生きて、久しぶりに再会した。何かほかに言いたいことがあっても不思議ではありません。

ところが、おじさんは誰にも、もちろん神様にも文句ひとつ言うことなく、わたしの銀祝を楽しみにしてくれたのです。かつて洗礼者ヨハネは、自分の弟子たちが「ラビ、(中略)あなたが証しされたあの人、洗礼を授けています。みんながあの人の方へ行っています。」(ヨハネ 3・26)と訴えてきたときに「花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている」(同 3・29)と答えたことがありました。久しぶりに再会し、身の上を訴えるのではなくわたしのこと

を心から喜んでくれるおじさんに、洗礼者ヨハネと同じような懐の広さを感じたのです。

人の言葉は思いを表すものです。予想もしなかった十字架を背負った 23 年の間にわたしのおじさんが何を考えていたか、少し想像できました。おじさんはどのような境遇に置かれたとしても、イエスに従うことを優先して生きてきたのだと思います。

「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」(マルコ 9・35) 自分に背負いきれないような十字架を背負わせたイエスに、本当なら文句の一つでも言いたかったはずですが、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になる道を受け入れたのです。

自由に動かない手足、思い通りに語ることのできない舌。鯛ノ浦でその名を知らない人がいないほど知られている人でした。そういう人にとっては受け入れ難い選択肢です。けれどもおじさんは、「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」(9・37) このイエスの言葉をそのまま、文字通りに今日まで生きてくださったのだと思います。

イエスは弟子たちにお尋ねになりました。「途中で何を議論していたのか」(9・33)。予想もしなかった晩年を過ごしながら、おじさんは何を考えて過ごしてきたのでしょうか。それに比べて、わたしは司祭として何を考えてここまできたのでしょうか。きっとわたしは責任を問われると思います。弟子たちがイエスの問いに黙ってしまい、答えられなかったように、わたしもイエスが考えていたものとは似ても似つかぬものを途中で考え、議論していたのだと思うと、返す言葉もないくらいです。

イエスは、弟子たちが途中で何を議論していたのかすべてお見通しだったことでしょうか。そのことには一切触れようともしませんでした。弟子たちが考えを改めてくれることを信じて、過去を問うのではなく、未来に目を向けさせたのです。

これからもっと自分に従うことが難しくなる。だから、今のうちにわたしの言うことに耳を傾けなさいと弟子たちに促します。わたしたちもまた、この先今よりもずっとイエスに従うことが難しくなる。それが見通せるのに、なぜわたしたちは耳を貸そうとしないのでしょうか。

「途中で何を議論していたのか。」わたしはしばしば、途中なんてどうでもいいのだ、結果さえついて来れば構わないのだと思って生きてきました。福見の園の敬老会で見た喜蔵おじさんの姿は、わたしに途中で何を考えるべきかを教えてくれたのだと思います。

敬老のお祝いを迎えた方々を前にして、もう一度戒めの言葉をいただいている、そんな気がします。わたしたちに途中で何を考えるべきかを教えてくださる先輩方に、神様がこれからも祝福された日々を与えてくださるように、ミサの中で祈りたいと思います。